

全日本実業団剣道連盟

会長 加賀谷 誠一

連盟設立から平成三年までの剣道活動

昭和三十二年十一月に全日本実業団体体育連盟から独立した全日本実業団剣道連盟は、第一回剣道大会を昭和三十三年九月二十一日東京後楽園ジムナジウムで開催後、大阪、名古屋、東京と会場を移し、各企業に対する剣道の啓蒙と実業団剣道の普及に努めた。昭和四十年の第八回大会と翌年の第九回大会は関東、中部、近畿、九州の四ブロックに分けて予選を行い、予選を通過した三十六団体が日本武道館に於ける中央大会に出場し熱戦を展開した。また、昭和四十年から四十八年まで団体対抗戦とは別に「得点や勝負にこだわらず、心の稽古に主眼を置いた剣道こそ実業人の剣道である」と、矢野初代会長の肝煎りで「道友手合せ」が行われ、最優秀者に精妙盃を贈り精妙録に名前を記録して、その榮譽を後世に残すことにした。

平成四年から平成十四年までの活動状況

長引く経済不況の波が実業界に押し寄せ、剣道活動にも影響した十年間であったが、剣道活動の維持と円滑な大会運営を図り、更なる活性化を求め次の改善を行った。

一、試合時間の変更Ⅱ従来全試合四分間としていたが、参加数の増加

に伴い、平成七年の第二十八回大会から準々決勝までは三分間、準決勝・決勝戦は四分間に変更した。

二、審判員数の変更Ⅱ一回戦から準々決勝までは二人制で行っていたが、平成九年の第四十回大会から、三人制に改めた。

三、女子並びに高壮年剣道大会の開催Ⅱ連盟設立四十周年を記念して、女子剣道大会（団体戦）と高壮年剣道大会（個人戦・四十歳以上）の開催を決め、第一回大会を平成十年三月二十一日東京武道館で開催した。参加数は女子六十一チーム、高壮年は三百六十名であった。この大会では、女子高段者による日本剣道形の演武と、女子の部の審判団は女子審判員を主体として編成した。

四、会員数の推移Ⅱ連盟発足時は八十九団体であったが、年々増加の一途を辿り、平成十年には四百四団体となった。しかし、長引く経済不況の影響により、企業の倒産や統廃合等に見舞われ登録会員は徐々に減少し、平成十四年には三百八十五団体となった。

今後の活動方針

過去四十五有余年の歳月を費やして先達が培った、輝かしい歴史と伝統をもつ実業団剣道の更なる発展を期すと共に、実業人の真の目的である「人格形成、剣道と仕事の両立、生涯錬磨」の指針を確かめ、会員相互の融和と剣技向上を図り、名実ともに充実した実業団剣道の維持発展を目指して行きたい。

（川口 文夫）

全日本実業団剣道大会



第一回大会は、昭和三十三年九月に後樂園ジムナジウムにおいて七十五団体が参加して行われた。

その後、参加団体数は飛躍的に増加し、昭和五十六年の第二十四回大会には二百四十八団体を数えるまでに至った。

開催場所も大阪や名古屋でも行われていたが、昭和三十九年に至り、日本武道館が新設されたのを機に、それ以降毎年、ここで開催されるようになった。

平成七年からは、従来全試合四分で行ってきた試合時間を運営上一回戦から準々決勝戦までを三分に短縮した。

平成九年の第四十回大会の参加団体数は三百三十九に達した。

また、この大会から女子剣道大会（団体戦）と高壮年剣道大会（個人戦、四十歳以上）を新たに加え、現在に至っている。

全日本実業団剣道大会

第三十六回
平成五(一九九三)年九月十五日
於・日本武道館

大将 四段 中尾 剛之
副将 三段 曾根 秀和
優勝 四段 今野 利昭
勝上 四段 滑川 康一
団電 四段 大島 朗央
優勝 次鋒 四段 大島 朗央
佐本 次鋒 五段 大島 朗央
富士 先鋒 五段 大島 朗央

第三十七回
平成六(一九九四)年九月十五日
於・日本武道館

大将 五段 松本 伸二
副将 五段 橋本 忠則
優勝 三段 山下 忠典
勝上 四段 河原 昌充
団海 四段 河原 昌充
優勝 次鋒 四段 河原 昌充
住友 先鋒 四段 下畑精一郎

第三十八回
平成七(一九九五)年九月十五日
於・日本武道館

大将 五段 飯沼 浩徳
副将 五段 有働 勝秀
優勝 四段 渡辺 三明
勝上 四段 立見 顕久
団海 四段 立見 顕久
優勝 次鋒 四段 立見 顕久
住友 先鋒 四段 宮本 貴之

第三十九回
平成八(一九九六)年九月十五日
於・日本武道館

大将 四段 車田 仁之
副将 四段 板原 浩
優勝 四段 了戒 貢
勝上 四段 吉田 昌幸
団海 四段 吉田 昌幸
優勝 次鋒 四段 吉田 昌幸
佐横 先鋒 四段 吉田 昌幸

第四十回
平成九(一九九七)年九月十五日
於・日本武道館

大将 五段 吉村 信人
副将 五段 上里 浩司
優勝 六段 大元 順
勝下 六段 植田 豊志
団電 六段 植田 豊志
優勝 次鋒 六段 植田 豊志
松下 次鋒 六段 植田 豊志
優勝 先鋒 四段 福森 賢治

第四十一回
平成十(一九九八)年九月十五日
於・日本武道館

大将 五段 宮本 貴之
副将 五段 立見 顕久
優勝 四段 山下 忠典
勝上 四段 山下 忠典
団海 四段 山下 忠典
優勝 次鋒 四段 山下 忠典
住友 先鋒 四段 小田口亨弘

第四十二回
平成十一(一九九九)年九月十五日
於・日本武道館

大将 五段 宮本 貴之
副将 五段 立見 顕久
優勝 四段 山下 忠典
勝上 四段 山下 忠典
団海 四段 山下 忠典
優勝 次鋒 四段 山下 忠典
住友 先鋒 四段 小田口亨弘

第四十三回
平成十二(二〇〇〇)年九月十五日
於・日本武道館

大将 四段 延 賢治
副将 四段 山形 剛
優勝 五段 小泉 誠
勝上 五段 小泉 誠
団警 五段 小泉 誠
優勝 次鋒 四段 甲斐振一郎
綜合 先鋒 三段 清武 直之

第四十四回
平成十三(二〇〇一)年九月十五日
於・日本武道館

大将 五段 南 昌和
副将 五段 山本 有樹
優勝 五段 福住 雅男
勝上 五段 福住 雅男
団日 五段 福住 雅男
優勝 次鋒 六段 谷 裕二
NTT 先鋒 四段 梅山 義隆

第四十五回
平成十四(二〇〇二)年九月十五日
於・日本武道館

大将 五段 宮本 貴之
副将 五段 立見 顕久
優勝 五段 小田口亨弘
勝上 五段 小田口亨弘
団海 五段 小田口亨弘
優勝 次鋒 五段 小田口亨弘
住友 先鋒 四段 外之内貴洋